

# 家の海から

白浜で出会ったたまごのつら

24

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)



打ち上げられたハリセンボン。大量漂着でよく知られる

## 打ち上げられても 食べられないフグたち

北浜に漂着する魚はクイアジ、ヒラメなど、鮮魚店で見かける魚はほとんどない。打ち上げると、『餌取り』として、釣り人に嫌われているフグやハコフグの仲間が多い。

生えているとげの武装をもっている。五島列島でいるが、しげのときには役に立たない。この他にもハコフグとウミスズメ、ハマフグがよく上がる。冬に打ち上げたハコフグは、婚姻色に近い美しい装い。

ち上がる。クサフグ、シヨウサイフグ、ホシフグ、サザナミフグ、キタマク毒、肝臓と腸には弱毒があるという。このフグ類も他の生物のウロコがないかわりに、鋭い棘(とげ)に変形しているハリセンボンやイシガキフグなども打ち上がる。

る目もある。他のフグ類が、いつもごく少数個体しか打ち上げられないのとは対照的である。ハリセンボンは、よく膨らまされて体中のハリを突きたてさせた乾燥標本にし、お土産屋さんでふんちゅうちゃんとして店頭を飾っている。このような生物の妙が鑑賞できるように死亡個体のみを使っていけば、問題はない。

# ハコフグは泳ぎ下手

瀬戸臨海実験所の田名瀬英明教官や榎山嘉郎科学技官と3人で、過去5年間、北浜にどんな魚類が打ち上がったかについて、昨年の南紀生物同好会会報の「くろしお」22号にまとめて報告した。

い)をまとったハコフグたちは、他の魚に比べると泳力が弱く、身重で動きが鈍い。南紀白浜といえども季節風の吹き荒ぶ冬季には体を岩などに打ちつけてしまつたのだから。ハコフグ類の中では、子供の手のひらサイズのシマウミスズメが一番多く漂着する。ブルーのスライプが入った愛くるしい種類だ。堅い鎧に加工して食べたりする。

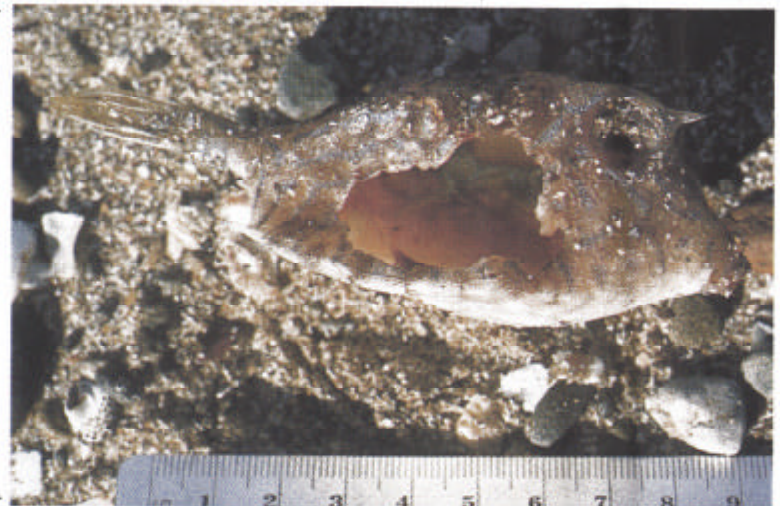
ハコフグ類に次いで、ところからきている。美しい網目模様は黒のしだが数本通っているあて

冬季に凍死した無数の個体が海岸に流れ着く。暖海の北浜でも多数の個体が見かけるが、地元の人々が釣って現場で皮をむき食用に持ち帰っている。しかし、白浜近郊では食用になつていないのを見たことはない。

イシガキフグはつばうらなひとみで愛くるしい顔をし、大人が一抱えするほどの大きなフグだ。ハリセンボンの仲間だが、体の棘は長く突き立てることはできない。すうたいが大きい分だけ目がつたつて、腐敗して鼻もさながらにおいが風向きで漂ってくる。埋葬しないで体が朽ち果てるのを待つと、後にたぐらん残るものがある。まるで忍者の手裏剣か、まさびちのようなウロコだ。海岸で拾つと、実に不思議な形をしている。



△ 打ち上げられたきれいなハナギンチャクフグ



荒波に食われて打ち上げられ、肉や内臓をカラスなどに食われたシマウミスズメ



イシガキフグの贈り物。忍者のまきびちのまきびち。皮膚の中に隠れていて棘の台になってる